

戦中派の遺言（結）

大賀 龍吉 陸士56

今年（明治維新150年）である。テレビでは「西郷どん」が放映され、記事も増えている。

黒船によって目を覚まされた島国日本が如何にして覚醒し、構造改革をなし遂げて独立を確保し、独自の繁栄を果すことが出来たか。

この一カ月は、明治の先覚の跡を偲び、特に西郷南洲公の遺訓と言行に浸ってきた。佐藤一斎『言志四録』、西郷南洲遺訓（手抄言志録及び遺文）等である。

思い起こせば、広幼時代は教頭先生の影響で、楠公に傾倒していたが、陸士予科に入って湯田光臣区隊長（49期）の感化で南洲翁に惹かれ、爾来、書物も読み、話も聞き、日常的にも大きな感化を受けた。

区隊長殿は、所謂支那軍冬季攻勢の際に、「石城湾」の守備に当られたが、一箇中隊の守備隊に対し一箇師の攻撃を受け、完璧な防衛戦闘で師団長を狙撃で斃し甚大な被害を与えて撃退された。

この功績により個人感状を受けられ

たが、特筆すべきは、部落の住民の老病・婦女子を平生勞り又撫育されていたので、防衛戦闘に当り住民が自発的に鍋・釜を被り守備陣地に食料・弾薬を運搬したことである。これは戦陣訓の「皇軍」の項に、皇軍の例として記載されたのである。区隊長は薩摩隼人の典型的人物であり、大西郷を心酔しておられた。

御着任後の最初の区隊会の時、区隊長が左の南洲翁の「偶成」詩を朗々と吟ぜられたのに感動して以来、小拙も、大南洲に傾倒するようになった。

「偶成」 西郷南洲

一貫唯唯諾 從來鉄石肝
貧居生傑士 勲業頭多難
耐雪梅花麗 経霜楓葉丹
如能識天意 豈敢自謀安

南洲翁の心境、敬天愛人の志がよくわかる。

石平氏は、日本は今、神武建国以来の危機であると言い、ペマ・ギャルポ氏は「日本人よ、中国の属国になつてもよいのか」を出版し、あまりにも危機意識のない日本の政治家・国民に対し警鐘を乱打している。

馬淵元駐ウクライナ大使曰く、「日米同盟によって日本の防衛は一応何とかなるかも知れないが、国内外の反日

勢力の謀略による自壊が最も危険である」と。危機意識の最も必要な政治家の質の低下は目を敵うばかりだ。

「先憂後樂」こそ、エリートの本質ではないか。

西欧では「ノーブレス・オブリージ」と言い、名譽ある地位には相当する高貴なる責任があるということだ。

藤原正彦教授曰く、「エリートたるリーダの資格は『教養、覚悟』の二つである」と。

『南洲遺訓』より引いてみよう。

一、命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり

二、正道を踏み、国を以つて斃るる精神なくば、外国交際は全かるべからず。彼の強大に畏縮し円滑を主として曲げて彼の意に順従する時は、輕蔑を招き、好親却つて破れ、終に彼の制を受けくるに到らむ

かかる透徹した教養と覚悟は、如何にして養なわれるのであろうか。

一つに幼少時の躰と青少年時代の文武両道の鍛錬である。更に覚悟（死生観）である。

元寇の北条時宗公以下の武人、幕末の志士にはこれがあつた。南洲翁も少

年時よりの郷中教育、更に農村担当としての実務と教養、特に人間として根本をなす死生観は無参利尚への参禅があつた。又、『言志四録』他、陽明学への研鑽がある。

元寇の時の北条時宗公の研鑽と果斷は蘭溪道隆禪師、仏光国師への参禅に依るところが大だ。

「事に臨んでは危険を顧みず、身を以つて責務の完遂に努め、以つて国民の負託に応える」と宣誓して自衛官となつている自衛隊員を文民統制の下に、非常の際に政治家が決断し処置出来るであらうか。現在の政治家を視ると甚だ心もとなひ。

仏国のマクロン大統領が2月に入つて、「徴兵制を復活させる」と宣言し、その準備に着手した。これは、大統領選の公約でもあつた。18、21歳の男女に一カ月間軍務を経験させ、毎年60万人の参加者を見込み、危機の際に国事補佐する予備役を確保し、軍や関連産業の人材を確保する狙いがあるとされる。佐藤元空将は『正論』4月号において、「国を守るのは苦役なのか」と題し、的確にこの問題を整理し、せめてスイス並みに成人式前後に身体検査を義務付け、フランスのように一カ月程訓練を義務付けすることを提案している。

『徴兵制が日本を救う』は楠谷勲夫

氏（陸自62）の著書だが、ペマ・ギヤルボ氏ではないが、真に「侵略に気付いていない日本人」、特に政治家に見られる質の劣化こそ日本の危機ではないだろうか。

「兵役は国民教育の場である」

ある調査によれば、「国家の危機に当り、一国民として国を守るために戦うか」との設問に、多くの国で70%以上、中には90%の者が賛成したのに対し、我が国は18%であつたと聞き、暗然たる思いだ。但し、救いは、中年層より若年層の方が率が高かつたということだ。敗戦後遺症に汚染されている層と、汚染の少ない若年層という見方も出来る。故渡部昇一教授の言われた「敗戦後遺症」の抜けない層と汚染の少ない層、或いは「マスコミ」の影響の大きい層と然らざる層ということも出来る。

日本人の本性は素晴らしい。戦後70年は徳川時代260年に相当するのだ。幕末期以上の国家存亡の危局を乗切るためには敗戦構造を打破し、名誉ある独立国日本の構造改革により打破できることを信じて、この稿を終りとする。